農作業 テクニカルダイアリー

Agricultural-work technical diary

秋冬ネギ

大網経済センター
ネギ専門営農指導員　内山　晃宏

ネギ黒腐菌核病

黒腐菌核病は難防除病害の一つで、糸状菌が原因で発生する病気です。晩秋から春先にかけて気温が10～15℃の時期に発病し、葉全体が黄白色に枯れ、株が萎縮します（写真❶）。

軟白部は褐色に腐敗し、黒ゴマ状の菌核粒（写真❷）が形成されます。根が腐敗しているため簡単に抜けてしまい、最終的にはなくなってしまいます。特に年明けに進行が早まります。

菌核は地中で5年以上生き続けるため、蔓延すると、産地の今後にも影響を及ぼします。必ず各圃場の発生の有無を確認し、対策を行いましょう。

【対策】

①連作を避ける

連作により菌密度が増加し、被害拡大につながります。まずは連作を避けましょう。

写真❶　黒腐菌核病発生圃場
（下葉が枯れ上がっている）

写真❷　黒腐菌核病症状

②土壌診断を行う

黒腐菌核病は土壌pH7～7・5に維持することで発病が抑制されます。

③薬剤による防除

多発している圃場では、土壌消毒が必須です（表❶参照）。使用基準を厳守し、必ず被覆を行いましょう。

発生の少ない圃場では、被害の拡大を抑えるため、生育期の薬剤散布が効果的です。散布の際は、土中の軟白部まで薬液が届くよう、10ℓ当たり300ℓの散布量を確保してください（表❷参照）。

④機械洗浄・残渣処理

発生圃場の収穫残渣や使用した機械・長靴の泥などからも菌は広がります。発生圃場で使用した機械は必ず洗浄し、感染した残渣は畑の外へ埋めるか、ビニールシート等で覆うだけでも感染拡大防止につながります。

写真❸
株元灌注用省力化器具
（写真提供：ヤマホ工業株式会社）

表❶　ネギに登録のある土壌消毒剤

薬剤名	使用量（10a当たり）	
ディ・トラペックス油剤	30 ～ 40L	※病気・線虫にも効果あり
バスアミド微粒剤	30 ～ 60kg	※使いやすく、病気・線虫にも効果あり
キルパー	60L	※安価で消毒可能
太陽熱消毒	※7 ～ 8月に被覆して高温殺菌(地温30 ～ 50℃で10日程度)	

表❷　ネギ黒腐菌核病に登録のある薬剤

薬剤名	使用方法	希釈倍率	使用時期	使用回数
アフェットフロアブル	1L/㎡の株元灌注処理	1000 ～ 2000倍	生育期（ただし、収穫14日前まで）	2回
パレード20フロアブル	100 ～ 300L ／ 10aの散布処理	2000倍	収穫前日まで	3回
セイビアーフロアブル20	100 ～ 300L ／ 10aの散布処理	1000倍	収穫前日まで	3回

最新情報をお届けします
「営農情報メール」配信中！　登録無料!!
作柄情報　病害虫対策　青果物概況　イベント案内　など
◆ご登録は、右記のQRコードまたはJA山武郡市のホームページから！
（スマートフォンもしくはパソコンのメールアドレスをご登録ください。）
◎JA山武郡市の組合員なら、どなたでも登録できます!!

スイカ

芝山経済センター
営農指導員　伊藤　統之

今年は梅雨が長く、特に7月は雨の多い日が続き、交配、圃場の排水、病害虫防除が課題となりました。今回は、その対策を紹介します。

交配時のポイント ～すいかふんの利用～

現在はミツバチ交配が主流となっています。ミツバチは過湿状態を嫌うため、雨天時や交配当日の低温では、動きが鈍り、良質な雌花や雄花があっても活動しない場合があります。この場合、人の手による交配が必要となります。

特に低温期の交配では、「人工花粉」を用いることも一つの方法です。人工花粉には、「すいかふん」があります（写真❹）。「すいかふん」は冷凍保存された花粉なので、使用前に常温で30分ほどおいてから使ってください。綿棒などで花粉をとり、1袋で約300本に使用できますが、開封後は2日間で使い切り、未開封の場合も家庭用冷蔵庫での保管は2カ月以内を目安としてください。

写真❹　すいかふん
（写真提供：萩原農場）

適正な土壌水分の確保

今年は、土壌水分が過多となる圃場が見られました。水が溜まりやすい圃場では、明渠等による排水対策を検討してください。反対に、土壌が乾きやすい圃場では、トンネルベッド内にチューブを敷くことをお勧めします（写真❺）。

例年、高温となる6月下旬から7月は、土壌中の水分を必要とする時期です。露地栽培の場合、降雨後でもマルチ内の水分はあまり増えませんので、マルチ内に直接、灌水することが必要であると、調査で判明しています。水分は着果だけでなく、その後の果実の肥大や品質にも影響します。

写真❺
トンネル栽培での
灌水チューブの設置

病害虫防除

今年は7月の長雨により、褐色腐敗病、炭そ病の発生が見られました。特に梅雨が長期化する場合は、例年よりも早めの防除を心掛けてください。

害虫では、アザミウマ類の発生が多く見られました。後作の抑制トマトでは、育苗中にトマト苗に寄生し、圃場へ持ちこまれ、被害が発生しました。アザミウマ類などの害虫は、雑草や収穫残渣に寄生しやすいので、収穫後の残渣は早めに片付けましょう。

9月に関東を直撃した台風15号により、多くの施設に被害が発生しており、復旧には非常に時間を要すると想定されます。特に、施設の再建、被覆資材の張り替えは予定通り進まないことも考えられます。このため、ハウス内の温度が確保できない場合、作付け時期を遅らせることや施設栽培からトンネル栽培への切り替えの検討も必要です。ご自身の農業経営に適した作型を提案しますので、ぜひ、最寄りの営農・経済センターまでご相談ください。

9月の分析経過について

残留農薬分析点数	多成分一斉分析	合計8点	
		抑制トマト	3点
		ミニトマト	1点
		抑制キュウリ	1点
		サトイモ	1点
		米（ちばエコ）	1点
		ゴボウ	1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 …… 合計10点